

Adam BedeのHayslope村, Silas MarnerのRaveloe村, Felix HoltのLittle Treby村がそれぞれの小説に意味するもの(2)

嶋 田 貴美子

4. Hayslope村, Raveloe村, Little Treby村の実態について

これら3つの村は、前号の2と3とでみてきたように、激動の時代の多かったイギリスの歴史の中でも特に激しい社会変革のあった18世紀末から19世紀初期にかけてのイギリスの農村の表象であるため、それぞれの小説の中でひじょうに興味深い様相を展開している。しかもこれら3つの村は時代的差異があまりない同じイギリス国内の農村でありながらも、それぞれが他にはないユニークな特質をもあわせ持つ。それはそれらの村が“there is no private life which has not been determined by a wider public life”⁽¹⁾というGeorge Eliot自身の理念にもとづいて彼女の意図するそれぞれの小説のテーマにもっともふさわしいバックグラウンドを提供するものとして選ばれた農村だからである。これらの、それぞれの村の持つ特異性がAdam Bede, Silas Marner, Felix Holtのテーマとどのような必然的な関連を持つのか探求することを趣旨とするこの論文の結論にいたる直前のステップとして、次にそれぞれの村の実態を調べ、各々の村が持つそれらの特異性を明らかにしておこうと思う。なお紙面の都合上、本号では4のみとし、5の結論は次号に回すことにする。

(a)Hayslope村について

Hayslope村はGeorge EliotがAdam Bedeを執筆するに際して“It will be a country story—full of the breadth of cows and scent of hay.”⁽²⁾と自ら言っているようにRaveloe村やLittle Treby村とは比較にならないほどcountry things, country peopleでおういつしており、country novelの舞台として強力な効果を持った典型的な農村である。George Eliotが多くの自分の小説の舞台を、好んで過去に設定した理由は、「進歩への確信を強調するのに都合良く、同時に過去の伝統の最高のものを慈しむ」⁽³⁾彼女の思想的傾向のためであった。そして彼女はそれらの舞台のすべてにたいして「丹念に調査を行い、設定時期の政治、風俗、気候その他種々のトピックでノートを埋め尽くしてきた」⁽⁴⁾のである。しかしHayslope村には「進歩への確信を強調する」思潮よりも、「過去の伝統の最高のものを慈しむ」思いがより顕著に表われ、その中で人間の素朴な生きざまに焦点が当てられている。したがってHayslope村がRaveloe村やLittle Treby村よりも典型的な農村の姿を持ったものである以上、やはりそのHayslope村はもっともイギリス的な農村の伝統の、最高のものを持った村としてGeorge Eliotの理念の中に構築された村ということができよう。そしてもっともイギリス的な田園地帯といえはGeorge Eliotの生まれ故郷であるWarwickshire近辺の諸州の中部イングランドなのであった。⁽⁵⁾

Hayslope村(州名はLoamshire)が現実にはどの村をモデルにしていたかということは、中部イングランドの豊かな田園地帯にある一つの村ということ以外にはそれほど重要なこととは思われないけれども、研究者達の中で言われている具体的な目安としては、「早くから単なる一職人としての技倆以上の力を修徳していた」George Eliotの父親が建築業を営んでいた地⁽⁶⁾StaffordshireのEllastoneであったというのが有力である。

George EliotはこのHayslope村をcountry novelの舞台として小説への効果を最大限に発揮させるために、3つの要素に重点を置いて綿密な描写を試みている。その1つは、HayslopeとそのとなりのBroxtonの両村にまたがる広い地域を所有する地主Donnithorne家であり、2つ目はそのDonnithorne家の領内でも主だった小作人の一人Poyser家、そしてもう一つはBroxton Vicarage(牧師館)である。

英国社会を語る場合には政治と宗教を切り離すわけにはいかない。Adam Bedeの中に初めてHayslope村が紹介された1799年のイギリスはすでにナポレオン戦争の3年目に入っていて、穀物の輸入がむずかしくなったイギリスでは、穀物価格の上昇のために「戦争景気の盛り⁽⁷⁾の時」であり、Donnithorneのような地主には大変好都合な時代で、したがってHayslope村のような古きManorの香りのする農村はかなり活況を呈していたとみなすことができるであろう。しかしFelix Holtに登場するそれぞれ2つのmanorの領主であるTransome家やDebarry家とは異なり、Donnithorne家は貴族階級には属していないため、けちでがんこものという批判の高いDonnithorne老人も小作人たちに対して、少なくともTransome夫人のような威圧感はなく、Hayslope村の雰囲気はMrs. Poyserの言動にみられるとおり民主的であるが、素朴な農民たちは独特の気質を持っておりAdam Bedeを一読すればわかることであるけれども、George EliotはHayslope村の雰囲気をさらに次のように総括している。

The bucolic character at Hayslope, you perceive, was not of that entirely genial, merry, broad-grinning sort, apparently observed in most districts visited by artists. The mild radiance of a smile was a rare sight on a field-labourer's face, and there was seldom any gradation between bovine gravity and a laugh.⁽⁸⁾

(ヘイスロープ村の牧歌的性格は、もうお気づきのことでしょうが、芸術家たちが訪れる地域の大部分ですぐに認められるように、全く愛想がよくて、陽気であけすけな笑顔を作るといったようなものではなかった。微笑の中にある和やかな輝きは農場労働者の顔には、まれにしか見られず、鈍重な沈着さから高笑いへと徐々に移るということもほとんどなかった。)

すなわちHayslope村はSilas MarnerのRaveloe村が持ちまへの奢侈的性格に加えNapoleonic Warの影響による地主たちの好景気に乗じてぜいたくざんまいの社交生活を楽しんでいたのとは全く異なり、まさにMrs. Poyserの言動にみられるように理屈っぽくちょっとぐちっぽいけれども厳格な道德律を持ち、反面、土に生きる農民の素朴なたくましさを持った村であった。そしてその道德律を作っているのが英国国教会牧師Mr. Irwineである。

英国国教会については、Felix Holtの中でLittle Treby村と共に小説の舞台となっているmanufacturing town・Treby Magnaにおこった反英国国教会のもろもろの宗教との比較の中

でその特色が述べられているが、Felix HoltのLittle Treby村のrector・Mr. Lingonがバンダナとbrown leggings⁽¹⁰⁾を彼の身体的特徴としたように、英国国教会のrectorは貴族の出身者が多くgentlemanであり、身だしなみそのものからして品よく優美であった。Irwine牧師も例外ではなく、Treby MagnaのDissenter⁽¹¹⁾のminister・Mr. Lyonが娘Estherの強引なおせっかいでやっと髪の毛をとかし、衣服を整えたのとはまるきり異なり、優雅に整えた髪には化粧用のパウダーをかけ、後方になでつけた髪を黒いリボンで結んでおり、堂々とした体つきと美しい顔立ちから一見して血筋のよさを感じることもできる人であった。またTreby MagnaのMr. Lyonが地主や貴族階級とは心情的に敵対感情を持っていたのに対してMr. Irwineは母親が老Donnithorneの孫Arthurのgodmotherであり、Irwine自身もArthurの家庭教師のような立場にあって、Felix Holtに登場する2人のrectorがそれぞれ2つのmanorの領主の兄弟であることなどを勘案すると、英国国教会は地主階級と密接な関連を持っていて地主の力の強い地域では誇り高い地位を確保していたのである。

George Eliotはこのような貴族的な英国国教会牧師の存在を過去のイギリス地域社会のgloryとしてあげているけれども、それは英国国教会牧師が敬意を持って迎えられる村は、彼らが上記のような存在である以上、貧困にあえぐような村では決してなく、青々とした牧草地が広がる豊かな農村であったからであり、彼らが、そのような貧しさから解き放たれた裕福な、そしてかつ社会的変動による不穏な空気も全く感じられない平和な農村にいかにもふさわしい存在であったことに対するノスタルジアにおいてである。しかし進歩への確信を強調する思想的底流によって彼女はそのような農村を全面的に肯定しているのではない。

Felix Holtを見ればわかるように、19世紀初期のイギリスでは、静かでのどかそのものであった農村や市場町が20年30年の短期間に一挙にして政治的社会的激動の嵐が吹き荒れるmanufacturing townに大変貌を遂げることも少なくなかった。そういった時代的変動の中から現われた新しい力である無骨な青年Felix Holtに対してもGeorge Eliotは暖かいまなざしを注いでいることからわかるように、彼女は社会の変化進歩を大いに肯定し是認する合理性も備えている。彼女の過去のイギリス地域社会のglory礼讃の裏には、産業革命や対内外的政治的激変の下で次々に失われていく古きよきものへの愛惜の思いと、夫Lewesとのことで絶縁を余儀なくされた故郷への望郷の念、すなわち過去のイギリス地域社会の栄光への愛惜とともに、彼女の幼少の頃の思い出と重なった自分自身の過去の栄光が投影されているのであるが、彼女がgloryに満ちた村を礼賛することだけにとどまってははいないことは、そのgloryが、進歩への確信を強調する思いが比較的弱いとみなされるHayslopeにおいてもAdam Bedeの小説の進行と共にすっかり色あせていくことをみても明白にわかるであろう。かくして地主Donnithorneの下にbreadth of cows and scent of hayがたちこめ、緑豊かな小麦畑が広がる、文字通り貧困を知らない平和なHayslope村は、Donnithorne老人の死と共に起こった世継ぎArthurの、農民の娘Hettyへのスキャンダラスな行為の発覚によるHayslope村離脱という事態を迎えて、村落共同体としての機構が大きく崩れていく。けれども、gloryに満ちていた農民の姿をより効果的に描き出すためには村民に多大の敬意を払われていて度量があり、慈善心に富んだMr.

Irvineのようなrectorはなくてはならない存在であった。しかし純粹に宗教家としてみられた場合、Mr. Irvineを含む、彼と似たりよったりの英国国教会牧師は、Methodistが2～3人いるのみでAdamの言葉の中にもみられるようなDissenterへの嫌悪感からしても他の宗教の入りこむ余地のないHayslope村においてはそのようなことはなかったものの他地域に住む熱意ある宗教家からは、「取りたてて何ら高邁な目的を持たず神学的な情熱も全くない」ものとして大いなる批判を受けていた。George Eliot自身も“This Rector of Broxton is little better than a pagan!” I hear one of my lady readers exclaim. (「このブロクストンのレクターは異教徒とほとんど変わらないじゃないの！」私はこの本の女性の一読者が叫ぶのがきこえる。)と述べているように、Adam Bedeが世に出た1859年当時では、Mr. Irvineのような古いタイプのrectorはすでに存在しておらず、George EliotがAdam Bedeの舞台を60年も以前のHayslope村に設定したことの中には、彼らは彼らなりにその地域社会に十分に役割を果たし、その地域と一体になって時を歩んだ、この古くからの長い歴史を背負った英国国教会牧師rectorの存在をもまたその小説の中で絶対化しようとする意図も含まれていたのである。

彼らに対する批判については、実際に19世紀初めのその当時の英国議会の報告書 (parliamentary reports) にも見られることであるが、特にGeorge EliotはTreddlestoneのtravelling preacher (巡回説教師) Roe氏の口を借りて、Irvine氏も含めた周辺の英国国教会牧師をmen given up to the lusts of flesh and pride of life. (肉体的欲望と生活のおごりにふけっている者ども)と表現している。即ち彼らはhunting and shooting, and adorning their own houses; asking what shall we eat and what shall we drink, and wherewithal shall we be clothed?—careless of dispensing the bread of life to their flocks, preaching at best but a carnal and soul-benumbing morality, and trafficking in the soule of men by receiving money for discharging the pastoral office in parishes where they did not so much as look on the faces of the people more than once a year. (狐狩りや銃猟や、家を飾りたてることに熱心で、何を食べようか何を飲もうか、何を着ようかということに思いわずらうのだ。信者に命のパンを施すことなど気にもとめず、せいぜい物質的な、魂を麻痺させるような徳性を説くだけであり、一年に一回以上は人々の顔も見ないような教区で牧師の任務を果たすことに対し、お金を受け取ることによって人々の魂と取り引きする) というのである。Mr. Roeのこの批判があながち個人的な見解ではないところをみると、Felix HoltのTreby Magnaの例からもわかるとおり、古い村落共同体の核としての地主階級の権威が失墜した地域においては、たちまち彼らにとってかわる新興の宗教が現われたのは当然である。しかしIrvine牧師は小説が始まって八年を経た1807年までHayslope村の人々の変わらぬ敬意を受けていたのであった。

Mr. Irvineと共に、いやそれ以上にHayslope村を特徴づけている存在は、その村がthe breath of cows and the scent of hayで満たされたものである以上、何といたっても実際にその条件を作り出している農夫、Poyser一家であろう。Mr. IrvineもPoyser一家も地主のDonithorneの人達もHayslope村のことごとくが先に述べたように作者が「丹念に調査を行ない、設定時期の政治、風俗、気候その他種々のトピックでノートを埋め尽くしてきた」あげくに創

出されたものであるだけに、Poyser一家には特に18世紀末から19世紀に入ったばかりの頃の農民の典型をみることができるであろう。

Poyser家の農場はHall Farmとよばれ、Fallという名前から推察されるように、「昔は地方郷土 (a country squire) ⁽²⁰⁾ の住居 (residence) であったが、家系が一介の未婚婦人に下落し、近くの地主Donnithorneという名前の下に埋没した」その邸宅のある農場で、その邸宅はかつてのそのような由緒ある住人にふさわしい立派な門構えと美しい外見を保っていたが、Donnithorneの所有の下でPoyser一家の居住となっている現在、その立派な門は以来一度も開けられたことはなく後方の大きな建物しか使用されてはいなかった。しかし建物自体は相当古いもののようでPoyser夫人の厳しい言葉によれば、それは「エジプトのいろいろな疫病を持っている家」であり、地下室はひざまで埋まるほど水がたまり、「かえるやひきがえるが何十匹となく階段をびよんぴよんのぼってくるし、そして床は腐り、ねずみたちはチーズをみんなかじってしまうし、寝てる時には頭の上を走り回ってまさに生きてるまんま食われそう」⁽²¹⁾ な勢いの家であった。家の維持は、Fall Farm自体が、Donnithorneの所有物である以上、Donnithorneに任されていたが、自分たちが「崩れ落ちるまで一度も修理してもらえないのをがまん」しているとか、例え頼みに頼んで修理してもらえたとしても、その経費の「半分は（自分たちが）支払わなければならない」などと言っているのをみると小作人の住居の維持管理は地主の大きな業務の一つであり、地主と小作人の間のお互いに得心のいく環境作りはなかなかむずかしい問題を含んでいたようである。

Adam Bedeのstoryの主な流れは1799年6月18日という冒頭に記された日付からほぼ一年間にしぼられ、一つ一つのできごとはPoyser家の農場で次々と取り行なわれる年間業務と共に進行する。まず1799年6月のその時期は、干草の取り入れを間近に控えた時期に当たる。この干草の香り (scent of hay) をGeorge EliotはHayslope村を構築する上の基盤としていることから推測されるように、干草作りは古い農村では小麦作りと並ぶ重要な仕事で、干草は農業業務の他に牧畜業や酪農業も営んでいた当時のほとんどの農家で自家用として大量に必要であったばかりか、交通手段を全面的に馬に頼っていたために一般の人々にとっても生活の必需品であり、19世紀初めまではmarket-townであったFelix HoltのTreby Magnaではチーズや卵やバター等と共に、大切な商取引の品目になっていた。

Hayslope村とBroxton村の2つの教区を所有している地主Donnithorneの小作人たちの中でも主だった小作人であるPoyser家の仕事は酪農業を除く小麦作り等の屋外労働のすべてがMr. Poyserと五人の農場労働者とで取り行なわれた。酪農はもっぱらMrs. Poyserに一任されていたが彼女の酪農場の管理には定評があり、またおいしいバターやチーズ作りの腕も確かであった。それがMrs. Poyserに、村の人たちみんなが恐れている老Donnithorneに向かって'I've a right to speak, for I make one quarter o' the rent, ... ⁽²³⁾ (私にもものを言う権利があります。だって地代の4分の一は私が稼いでいるのですから...)'と大みえをきる強さを与えているのである。その他Poyser家では養鶏、養豚と共に羊の飼育も行なわれ、朝早くから多忙な日々を送っていた。Mr. Poyserの仕事の助け手として先に述べたとおり五人の召使いがいた

がその中の一人、「Loam州随一の、農業(farming work)の本質に精通し」、前Martin Poyser氏の代からPoyser家の農場で働き、「ずっと昔からただいちずに耕してきた土にまみれ」、「給金としては最少の額しか受けとっていない」Kester老人⁽²⁴⁾には、George Eliot自身も多大の恩恵を告白している。他に「農場での大の人気者で昔のjester⁽²⁵⁾の役割をつとめ」、羊の毛を刈ったり、干草作りの時期に大いにその役割が発揮されたTom Saft、羊飼いや兼召使い頭で無上の正直者であるAlick、馬を愛するやさしい御者のTim、それにひじょうに力持ちの脱穀者Ben Tholoway⁽²⁶⁾がいたが、先にも述べたように彼ら農場労働者は、朗らかに笑うこともない鈍重な性格で、同じ主人に仕えてはいるものの彼らが互いに仲がよいという訳ではなく、‘Don’t you meddle with me, and I won’t meddle with you’⁽²⁶⁾（「おれのことによけいな手出しはするな。そうすればおれもおまえのやることにおせっかいはやかないから」）というような、個別主義のムードが暗黙のうちに互いの間に流れていた。それは「クリスマスと日曜日以外は一年中毎日、生垣の下で間にあわせに用意してきた冷たい食事を取り、木製のびんからビールを飲む」土に生きる男たちにえてしてありがちな性格だったのである⁽²⁷⁾

まず六月に小説が始まったあと、最初の農業業務は、その月の下旬の干草作りであった。朝露が消えるとすぐHayslopeの村人たちはこぞって牧草地に出かけて行く。干草作りは主婦や娘や女中たちもまじえ一家総出で行なう仕事であり、農家の仕事の中ではとても忙しい反面むしろ楽しい労働であった。彼らは互いに、少々卑猥な傾向もある愉快的な会話を交わし、どっと笑い声をあげながら作業を進めていく。George Eliotはこの時の情景を“The jocose talk of haymakers is best at a distance ; like those clumsy bells round the cows’ necks, it has rather a coarse sound when it comes close, and may even grate on your ears painfully ; but heard from far off, it mingles very prettily with the other joyous sounds of nature.”⁽²⁸⁾（「干草作りの人々のおどけた話は遠くにきこえてくるのが一番いい。牛の首につけられた無骨なすずのよう⁽²⁸⁾に近くできくと粗野な響きがあってきくにたえないほど耳ざわりな時すらある。しかし遠くできいていると、それは、自然の持つ他の愉快的な音ととてもうまく混じりあうのだ」）と言っている。この干草作りは一日で終る訳ではない。刈った干草を何日か牧草地(meadows)に干した後、家の庭に取りこむのである。何しろ羊や牛や豚などたくさんの数の食欲旺盛な動物たちの冬場の食糧であり、また市場に出荷するともなれば、干草の量もそうとうな量に及んだことであろう。

8月の半ば過ぎになると小麦の刈り入れが始まり、それからしばらくして大麦(barley)の取り入れがあり、一年の畑作物の収穫は終わる。それゆえ大麦の収穫が終わった日には“Harvest Supper”（『収穫晩餐会』）が開かれる。Poyser家では大麦の最後の荷がFall Farmの中庭に入る門の方に道をうねうねと進んでいくと、家の方からは“Harvest Home”（『収穫の我が家』）の歌がきこえ、そして一年中で一番楽しい時を迎えるのである。

晩餐にはPoyser家の新しい納屋の建築を監督した時から親しくしている大工のAdam Bede、私設の学校を開いているBartle Massey、地主Donnithorne家のgardonerなどが招かれ、五人のHall Farmの農場労働者、それから、Mr. Poyserの父親老Martinと3人の子供、

それにHetty, 侍女二人, Poyser夫妻の総勢が共に祝いの席に着く。まずほしぶどう入りのプディングが食卓に出され、次にその日のメインディッシュであるローストビーフが供される。ローストビーフを食卓の者たちに切り分けるのは一家の主人であるMr. Poyserの役目であり、彼は特に一年の農場労働をしめくくるその日に、自分のservantとして誠心誠意働いてくれたかの五人の農場労働者にたいして上機嫌なもてなしを与えるのであった。先にも述べたように彼らは普段は生垣の下で冷たいまにあわせの食事をし、つましく暮らしている人達だったので、このように熱いローストビーフや、くんだばかりのエールの風味に大いに魅せられ、それらを飲み食いすることは「話などして気を散らせることのできない重大な仕事」であったのである。実際その日に限って彼らは何度でもお代りのお皿にこれらのごちそうをふんだんに盛ってもらうことができた。

“Harvest Supper”はその夜の大きい儀式で終わる。テーブルクロスが取りのぞかれコップになみなみとつがれた酒（エールと思われる）を飲み誰もが収穫の歌を歌わなければならないという儀式である。歌はすべて四行詩で最初のstanzaでは主人（master）と女主人（mistress）の健康を祝し、そして2番目のstanzaでは主人の仕事の繁栄と善良なるservantであることの証しが歌われる。その後servantの頭であるAlickの器にまずなみなみと酒が注がれ、Alickは三番目のstanzaの、酒を勧める歌のchorusが終わるまでの間にそれを飲み干さなければならない。それからKester老人に順番が回り、chorusに刺激されて全員が最初の一杯を飲み終わる。これはあくまで農場労働者たちの真剣なdrinking ceremonyなのであった。それから招かれた人たちと主人夫婦との雑談、servantの歌などがあり、10時前には全員が帰宅する。

Harvest Supperで一年の仕事がしめくくられたとしても年間の農家の仕事一切がその大麦の取り入れで終わった訳ではない。その後農家には冬越しの仕事が待っている。りんごやくるみは取り入れられ貯蔵された。農家からは乳漿の香りに代わって醸造（brewing）の香りがただよってくる。翌年の夏以降に飲まれるbeerやaleの仕込が始まったのである。その他酪農の中でも一番利潤が高いと言われているミルク搾り、バター、チーズ作り、鶏の世話をしひな鶏を育て卵を集める仕事は年間を通じて行なわれていた。

そして9月29日のミカエル祭には奉公を済ませたりまた新しい働き口を求めたりする若い男や女たちが、包を腋の下にかかえながら黄色くなった生垣の間をぬって歩くのである。そして2月の上旬頃になって残っていた雪がすっかり解けると畑は鋤かれ、いよいよ農作業の新たな一年がスタートするのである。

農場労働者を除いて、農民としてランクされる小作人の生活水準については彼らの食生活を見ればおよそその見当がつくであろうが、上に記したHarvest Supperは別としても、概して彼らはかなり豊かな食生活をしていて、特にPoyser家では家具調度類にも誇り高き農民の気概をうかがうことができた。夏のある日AdamがHall Farmを訪ねた時Mrs. Poyserが用意した食卓には、市販の安物ではない、「二代にもわたってもちそうな、感じのよい褐色がかった白地に格子模様の手織りリンネルのテーブルクロス」がしかれ、子牛の肉（veal）と新鮮なレタス、詰め物をした背肉（stuffed chine）⁽³²⁾、香料（flavour）の入ったソラ豆、自家製のエー

ルや弱いビール (small beer) , 冷たいじゃがいも等が供せられた。特に当時では香料は貴重品で、召使い頭のAlickは、「自分が食べ始めたそら豆に香料が入っていることがわかるやいなや、それを一番上等なパイナップルとでも交換したくないと思った」ほどである。

Poyser家のこのような豊かな暮らしは肥沃な土壌を持つHayslope村の農民であるが故のことであるかもしれないけれども、それから40年を経ているとはいえ、Mrs. Gaskellの*Mary Barton*に見られるManchester近辺のmanufacturing townの労働者たちの貧困のありさまからすれば、いくらMrs. Poyserが農民の生計の苦しさを訴えたとしてもそれはまさに楽園での生活としか感じられないぜいたくなものであった。George Eliotの小説はその多くがcountry lifeを背景に置いているが、*Mill on the Floss*や*Middlemarch*のような、*Mary Barton*とあまり変わらない時代のcountryにおいても、それは飢えに苦しむようなものでは決してない。産業革命によってmanufacturing townにもたらされた貧困に待つまでのこともなく、以前のイギリスにも貧困はあったであろうけれども、このようにGeorge Eliotがcountry lifeの中でも中流から上流に位置する人々の織りなす世界を小説の背景として選んでいたのは、Mrs. Gaskellが*Mary Barton*を人道的にもこれ以上見るに堪えない惨状を呈していた1840年前後のManchester近辺のmanufacturing townに生きる人々の生活を背景に描き、そこに小説の中で自分が主張したいことをより効果的に表現できる状況を見いだしていたのと同様、George Eliotは自分が追及する人間性についてその本来の姿ができるだけゆがめられることなく露見される生活の場として、ある程度の生活が保障されたcountry lifeを選び出していたのであろう。

とにかくHayslope村は1で述べた*Felix Holt*のIntroductionの中でGeorge Eliotが指摘しているgloryで満ちている村であった。

(b)Raveloe村について

George Eliotはa story of old-fashioned village life (昔ながらの形態を保った村の生活の物語)を意図して*Silas Marner*を書いた。そしてそのold-fashioned villageの典型として選ばれたのがRaveloe村であった。⁽³³⁾しかし、*Adam Bede*の中でGeorge Eliotがthe breath of cows and the scent of hayに対する限りない憧憬につき動かされてHayslope村を描いているとは視点が異なり、*Silas Marner*の中で描こうとしているのはそういう形態に主眼がおかれた昔ながらのvillage lifeであるため、当の小説の中ではそのRaveloe村の村人たちの生活形態や心情といったものに主力が注がれているのは言うまでもない。*Silas Marner*は主人公SilasがRaveloeに住みついてから55歳にいたるまでの間に体験したことがらを通じてもたらされた内面的変遷のstoryであるため、Raveloe村の実態を見る上での厳密な時の限定はむずかしいのだけれども、1章に表われる‘In the early years of this century (=19世紀)’という表現を手がかりにすれば、*Silas Marner*はその15年前にRaveloe村に住みついたのであるから1780年の終わり頃から1820年代にかかるかかからないぐらいの間をその時代的背景としてみなすことができるであろう。そしてSilasがLinen WeaverであったということがこのRaveloe村の時代を決定する重要な要因となっているのである。というのはイギリスにおいてlinen産業はこの時期に隆盛衰退の過程をたどったからである。

SilasがRaveloe村にやってきた頃であるから、1780年の終わり頃と推定されるが、その頃「村の農家では糸紡ぎ車 (spinning-wheel) がぶんぶんとせわしげに音をたて、絹やレースの衣装で着飾った上流の貴婦人たちでさえもきれいにみがいてあるオーク材製の糸紡ぎ車のおもちゃを持っていた」⁽³⁴⁾ほどリンネルの糸紡ぎはRaveloeのような古い村落では盛であった。Linenの原料flax(亜麻)は当時作物としていたるところで作られ、Adam Bedeの中のMrs. Poyserもリンネルのテーブルクロスや反物などをPoyser家の財産として大切にしていたように、リンネルは富んだ人にも貧しい人にも敷布、シャツ、下着、テーブルクロス等に仕立てられる重宝な必需品であり、Raveloe村の主婦たちも「後の暮らしに備えてせっせとリンネルをためこんでいた」⁽³⁵⁾のであるが、それをたくさん所有することが家計の豊かさを象徴するものともなっていた。⁽³⁶⁾自家製のflaxを自ら紡ぐ場合も多かったが、flaxの糸を持っている人たちは「Silasのような、その地 (に住みついた織物) の専門家に注文して自分の好みに合わせて織ってもら」⁽³⁶⁾ったものである。「Raveloe村でのSilasは注文織子 (customer-weaver) であったが、一人の主人の下に雇われている村既存の織子 (village weavers) よりも収入はよかった。そういう既存の村の織子たちは後にはそれだけで生計を立てていくことをあきらめ工場の織機で働かざるをえなくなったのである。」⁽³⁷⁾「Silasは織物の仕事で毎週約一ポンドは稼ぎ出した」のであったが、これは当時としてはかなりの高額所得なのである。「織物はこの時期 (「景気のよい戦時中」) には高額の支払いを得た技能であった。」⁽³⁸⁾しかし「chapter 16の時代、それは遅くとも1820年代に当るが、そこでGeorge Eliot (いつでもそのような事象に厳密である) は、『織物業が衰退し始めた—というのはflaxが急速に紡がれなくなったため』という村の状況の説明を私達にしているのである。」⁽³⁹⁾

MarnerがRaveloe村に住みついた頃のRaveloe村の村人たちは織物の商いは人々の生活には必要不可欠のものとは思っていたものの、そういう「ふだんあまり見なれない人や物、あるいは行商人や刃物研ぎ屋のようなほんのたまにしかやってこない者たちに対してすらすぐに迷信的な考え方をしがちで」「悪魔 (Evil One) の助けなしにはやりとげられるものではないという不信感をいだいていた。」⁽⁴⁰⁾「当時の百姓たちにとっては彼らが直接経験することができる世界のほかは不明瞭な不思議なところだったのである。」そして「村人たちになじみのない技術に秀いでること自体、あやしいことだと思われたのだ。」⁽⁴¹⁾村人たちはみんな正直で善良で、生まれも育ちも明白であり、せいぜい天気の特徴がわかる程度でとりたてて利口なわけでもなく器用でもなかったので、特にすばやい手つきで器用に成される織工たちの仕事は彼らには魔術か何かのように思われたのである。それで、町から移住してきて村のあちこちに住みついているlinen-weaverは村の隣人たちに最後まで疎外され、孤独な境涯に置かれていた。

linen-weaverが村人たちの奇異なまなざしでながめられたもう一つの理由は彼らのたてるききなれない織機の音である。とうみ (winnowing-machine) の自然で愉快的ゴトゴトゴトなる音や、からざお (frail) の単純な調子に慣れたRaveloe村の子供たちにとって、Silasの織機のたてる響きは半ばこわくもあったが、反面魅力的なものでもあり、Silasの小屋をよくのぞきに行ったものである。しかしSilasの青白い顔からとび出した褐色のそのぎょろ目は、白毛

頭の百姓の中に今だなお根強くある昔の名残りの悪魔信仰⁽⁴³⁾ (demon-worship) をよび起こさせるに十分であった。特にMarnerが母親から教えられた薬草とその処方で村の重症の心臓患者を治してからは、村人たちはなおさらMarnerをdemonとの関連の中でとらえがちになっていた。

そういう悪魔信仰や迷信, Silasをgnome⁽⁴⁴⁾またはbrownie⁽⁴⁵⁾とみる妖精信仰⁽⁴⁶⁾あるいはCliff's Holiday⁽⁴⁷⁾を信じる悪霊への恐れ等々のprimitiveな意識からおして知るRaveloe村の人々の自然のままの生活形態と, Silasが町から持ちこんだ機械である織機は, 生活を楽しむことにことに貧欲なRaveloeの村人たちとはうってかわって何の楽しみも求めずただひたすらその機械の一部のようになって布を織るSilasの生活と共に, そもそもその根底から相いれないものだったのである。

このように豊かな独自の地域性を持った村として当然考えられるように, Raveloeは「どのturn-pike (通行税取立門) からも馬で一時間ほどもかかるところにあってcoach-horn⁽⁴⁸⁾の響きももろもろの世論もうるさくきこえてこない, 気持よく木々のおいしげった窪地に位置した村であった。」そのためこのRaveloe村は, 近くの市場町Treddlestone⁽⁴⁹⁾やまた農作物の商取引で近郊の都市とかなり密接なコンタクトを保っていたことがうかがえるAdam BedeのHayslope村よりも, さらにずっと昔ながらの村落共同体としての地域色が色濃く残っている村であって, またさらにHayslope村よりもなお産業革命の意吹も感じられることのないtimeless villageで, 「昔の声のこだま (echoes) の多くがなかなか消えやらずにそこここに残っている」ような村であった。がそれにもかかわらずRaveloe村は「文明の辺境の地に位置した, やせこけた羊たちやほんのまばらにしかない羊飼いの住むような不毛の教区の一つではなく, 喜びをもってMerry Englandとよぶ肥沃な中央平原にあり, …大いに望ましい10分の1税を納める農場をたくさん持」っていた。1で述べたGeorge Eliotがgloryとしてあげている立派な古い教会や大きな教会墓地, それに小じんまりした牧師館が村のまん中であって, Felix Holtの中のLittle Treby村のような大きなpark (獵場) とか荘園 (manor) とかはなかったが, 「実にまづいやり方で気ままに農業をやっているにもかかわらず戦争景気に乗じてそのへたくそな農業からたっぷりもうけたお金を奢侈な生活で浪費し, Christmas⁽⁵⁰⁾やWhitesuntide⁽⁵¹⁾やEaster⁽⁵²⁾を今だにこよなく楽しんでいるお歴々も結構いたのである。」⁽⁵³⁾

村にはRainbowという居酒屋があって, そこは村人たちの格好な社交の場であり, 何か村で事件が起こった場合に教区牧師や地主のCass氏や他の教区の主だった人たちが集まって協議をする場でもあった。少々身分の高い客は火に一番近いところにすわってspirits⁽⁵⁴⁾を飲み, fustian jacket⁽⁵⁵⁾や野良着 (smock-frocks) を着た人たちは主にビールを飲むのが常だった。そして村人の多くはこのbeer-drinkersだったのである。彼らの中には肉屋 (butcher), 獣医 (farrier), 仕立屋兼教区執事 (tailor and parish-clerk), 代理執事 (deputy-clerk), 車大工 (wheelwright), それにもぐら獲り (mole-catcher)⁽⁵⁶⁾ という珍しい職業の者もいた。身分の高い人も低い人たちもRaveloeの村の人たちは, 一日の仕事が終わった夜などよくこのRainbowに集まっては世間話に花を咲かせ親しく酒をくみ交わしたものであった。したがっ

てRainbowはある意味ではRaveloe村全体の縮図とも言えるものである。階級意識の強いRaveloe村の風潮を反映してRainbowでは一般の村民の中でも火のそばにすわってspiritsを飲む客とその周りでbeerを飲む客とが区別されていたことの他に、村の旧家とか地主とかの身分の高い人々と普通の村人とかが集まる場所もはっきり分けられていて、Rainbowの入口の右手にあるbarとkitchenとがいっしょになったところは村人のものであり、一方、上流に属する人々の行くところは左手のparlourと決められていた。parlourにきた地主は自分でも酒を楽しみ、さらにしばしばbarの方にいる目下の者に酒をふるまうというdouble pleasureを味わったものである。

barの方での村人たちの話は、口の重い朴訥な古いスタイルの村人たちに特有のぎこちなさがあったが、それでも一端会話が盛り上がってくると遠慮会釈のない彼らの語り口は口論的な傾向を持ち始めることもしばしばで、公明正大なRainbowの主人Mr. Snellの仲裁を要することも多かったが、そういうあけすけな言葉のやりとりがまた逆に結果的にはRaveloe村と同じ地域共同体に属する者同志の連帯意識を強めたことも否定できない。とにかく、Silas Marnerにとっては「妻たちがありあまるほどのリネンをためこんでいるような金持でがっしりした体かくのだんな衆がよく出入するぜいたくなところ」であったRainbowに集う人々は身分の高い人も低い人もその一人一人がRaveloe村になくてはならない存在であり、Rainbow自体も含めてそのすべてがRaveloe村の重要な構成要素だったのである。

Rainbow村で随一の権威者はSquire Cassであったが、彼はAdam Bedeの中でHayslope村とBroxton村との両方を所有していたSquire Donnithorneほどの大地主ではなく、Raveloe村に何人かいる土地持ちの一人に過ぎない。しかし彼だけがSquireとよばれる栄誉に浴していたのは、例えばOsgood家がRaveloe村では何代を経たかわからないようなtimeless originを持つ家柄でありながら、自分が耕す畑しか持たないyeomanであったのに対して、彼は一人や二人小作人(tenant)を持っていて、この小作人たちは単に階級を重んじるRaveloe村の地域性からSquire Cassをまるで領主(lord)でもあるかのように頼りにしていたからである。

先にも述べたように当時のRaveloe村の上流階級にある人々の生活は奢侈的傾向が強く、ChristmasとかWhitsunとかEasterのtideには、今日の人々の想像を絶する饗応が、古代から代々Squire Cassの家を中心にくり広げられ、馬にのるのさえたいぎなほどの肥満に加えて痛風だとか脳卒中などの病気を引き起こす原因ともなったのであるが、一方当の金持たちはそういう病は「立派な家系に不思議に遺伝するものだ」として逆に誇らしく思い、過度の饗応をひかえるところかなおさら飲んだり食ったりのし放題で、ことに農業にはシーズンオフに当たる冬の饗宴は幾日ものあいだ続くのであった。饗宴にはハムとか他のあらゆるごちそうの他に、まるごとの牛のすね肉や、何樽ものエールが用意され、そしてSquire Cassのところのごちそうが残り少なくなったり、時間がたって味がおちたりすると来客たちはほんの少し上手のOsgoodの家に行けばよかった。そこには作りたてのハムや背肉が丸ごと並べてあり、まだ火の香りのするポーク・パイや、そしてSpun ButterなどなどがSquire Cassのところよりも量的には少ないものの、より完璧に近い形で食欲がおもむくままに用意されているのであった。

このようにあびるほどの飲み物と食べ物の山が用意された宴であったから、たくさんの残り物 (orts) ⁽⁶⁰⁾ が出るのがつきもので、それは「貧しい人々の相続財産となった。」⁽⁶¹⁾ そのため歓楽の季節が巡ってくると「貧しい者たちはそれをすべての面で大そう結構なことと思っていた」⁽⁶²⁾ のである。中でも一番盛大な宴会はSquire Cassのところで大みそか (New Year's Eve) の日に開かれる大舞踏会である。これは先祖何代にもわたって昔からCass家で行なわれ続けてきている盛大な饗応の催しであった。この日はRaveloe村ばかりではなく隣のTarley村の主だった人たちがみんなCass家に集まって旧交をあたためたのであった。馬に乗ってくる貴婦人たちは何日も続くその宴会のためにたくさんの衣服をつめこんだ衣裳ケースを前もってCass家に送りこみ、そして一方Cass家では、まるで籠城期間でもあるかのように大量の食物と膨大な数の羽毛ふとんが用意されていた。

このような豪奢なCass家の生活はその家の飼犬にまで及び朝食として貧しい者にはたっぷり休日のごちそうになるほどの牛肉が与えられるほどであったが、その実、Cass家の家計はそれほど豊かなものではなかったのである。Squire Cassは長男のGodfreyが自分の愛馬Wild-fireの死去を告げた時、次のように言っている。

“...What with mortgates and arrears, I'm as short o' cash as a roodside pauper. And that fool Kimble says the newspaper's talking about peace. Why, the country wouldn't have a leg to stand on. Prices 'ud run down like a jack and I should never get my arrears, not if sold all the fellows up. And there's that damned Fowler, I won't put up with him any longer; I've told Winthrop to go to Cox this very day. The lying scoundrel told me he'd be sure to pay me a hundred last month...”⁽⁶³⁾

(「…抵当や地代の滞納なんかで、わしは今道端のこじきみたいに金に困っているんだ。あのキンブルのバカ者が言うには平和が来るって新聞に出ているそうだ。そうなりゃ田舎は片足ですら立っていられなくなるだろう。物価は万力で下すようにどんどん下落するだろうし、やつらをみんな売りとはさなけりゃ滞っている地代も取れなくなるだろう。そうそうあのファウラーの奴め、あいつにはもうがまんならん。わしはウィンスロップに今日中にコックスのところに行くように言いつけておいた。あのうそつき野郎は必ず100ポンド払うって先月わしに言ったんだ。…」)

Squireのこの言葉の中にはCass家の家計の逼迫した内情と長年にわたるNapoleonic Warsのための外国からの穀物の輸入がとまったことによる穀物価格の騰貴が農民や地主たちにとっては「特別の神の恵み」⁽⁶⁴⁾ と思われたそのglorious war-timeが終結し、穀物価格の下落という特に地主たちにはありがたくない事態を招く平和へのきざしがみられる時代的背景、それにSquireと小作人との間の非友好的関係、すなわち地主としてのへたくそな土地管理の三点を見出すことができる。この三点はどれも近い将来起こりうるSquireの地位の失墜を暗示するものであったがSquire自身その危機感はそれほど痛切には感じておらず、上に記したような饗応は依然と変りなく、いやさらにもましてよりぜいたくに取り行なわれた。このようなRaveloe村のchiefs (お偉方) の饗応好きは、彼らの大部分がyeomanの階級に属していたためであり、

前号3で述べたようにそれがyeomanを特徴づける際立った特質だったのである。しかし*Mill on the Floss*の中に登場するMr. Pulletもthat extinct class of British yeoman（すでに絶滅した階級であるイギリス・ヨーマン）とことわり書きはあるがyeomanの特質は備えていて、常にすばらしい黒ラシャ（broadcloth）で仕立てた服を着ており、高額の方税と国税（high rates and taxes）を払い毎週きちんと教会に行き、日曜日には特別ごうせいなごちそうを食べたというが、彼は、*Mill on the Floss*の執筆年代1860年当時くじゃくが放し飼いされた大庭園を持ち裕福なfarmer（多分農業資本家）となっていて、ナポレオン戦争や産業革命・農業革命等々の激動の時代を生きのび、さらに近代的イギリス社会において確固たる地盤を築いたyeomanの一人として注目に値する。彼の人生態度は‘nervous about his investments, and did not see how a man could have any security for his money unless he turned it into land. (chap. IX)（投資については神経質で、土地にかえておく以外、人はどのようにして自分の資産を保障できるのか全くわからない）というような堅実なものであった。このようなMr. Pulletと比較するとRaveloe村のchiefsに感じられる過度の奢侈性と退廃ムードの中には、目の前に迫ったyeoman存亡の危機に際して消え去りゆくべき影を宿しているように思われてならない。

Rainbowに集う村人たちのそれぞれがRaveloe村の構成要素であるとすれば、階級的にその村人たちの頂点に立つSquireはまさにRaveloe村を包括する存在であった。彼はRaveloe村でただ一人Squireとよばれるその地位的なプライドで、昔ながらのRaveloe村自体の風習でもある奢侈的な習慣は立派に取り行ない、旧弊な農村をそのままの形で温存する中に自己の安住の世界を見出している。しかし前号3でみてきたように、後期重商主義政策や産業革命、それに並行して行なわれた第二次農業革命等々、19世紀のイギリス社会は町も農村も激動の時代であり、いくらRaveloeのようなtimeless villageであってもその余波は避けられないものであった。Cass家とかOsgood家のようなRaveloe村の上流階級の人たちは、*Felix Holt*のTransome家ほどではないにしても新しい時代の動きの中で旧弊な農村に現われ始めた矛盾をその存在の中に取りこんでいるようにみえる。そして彼らの地位の失墜と共にRaveloe村も昔ながらの独自の村落共同体から新しい時代に即したものと脱皮していく兆しが見えるのである。

Raveloe村は宗教面においてもものどかなもので、村人たちは日曜といえども是非とも教会に行くということもなく、「礼拝の時間でもただ自分の家の戸口にたたずんで教会の方をじっと見つめている」だけという有様であった。Raveloeの村人たちは「牧師（clergyman）というものは祈⁽⁶⁵⁾とう書を読んだり説教したり、洗礼を施したり結婚させたりあるいはまた埋葬したりする独特の権限のほか、墓地をほしい人に地所を売ったり十分の一税を物納させる権利もあわせて持っているものである」ということを当然のこととして認めており、したがって彼ら牧師が「欠点もほどほどに持ったごく普通の人間ではなく、青白い顔をした厳粛さの現化でなくてはならない」などとは思ってもいなかった。そしてその考え方はまさにRaveloe村のRector・Crackenthorp氏の人となりにぴったり当てはまるものだったのである。このCrackenthorp氏の俗っぽい人間性は*Adam Bede*の中のBroxton村のRectorでHayslope村のVicarである

Mr. Irwine, それからFelix HoltのLittle Treby村のRector・Lingon氏等の英国国教会牧師全員に共通して言えることで、彼らは世の中が平和で貧困もなく、階級的意識の強い保守的な村落に特徴的な宗教的権威であった。しかしHayslope村のMr. Irwineが、牧師としての職業上の批判はあったもののIrwine氏自身の持つ独得な人徳でそれを克服し村人たちにこよなく愛されていたのとは異なり、このCrackenthorp氏は余り宗教的に熱心でないRaveloe村の風潮からいたしかたのないことであったかもしれないけれども村人たちにはそれほど身近な存在にはなっておらず、上記の十分の一税の物納については村人たちの間に多少の不満をかもし出していたのである。それはRaveloe村の村人たちの中にSquire Cassの家の子供たちの素行があまりかんばしくないことに対してCass家の家庭の体裁を批判する目が開かれ始めたように、村人の意識が権威をそのまま受け入れようとする強い保守的な受動的傾向から良い悪いを自発的にみきわめようとする能動的傾向へとほんのわずかではあるが移り変わってきていることを示すものでもあろう。それにしても階級に過敏で権威に弱いRaveloeの人たちが、その階級と権威の頂点に立つSquireやRectorを批判し始めたということは、このSquireやRectorの在り方に相当な矛盾が生じ始めていたということのあかしでもあった。さらにCrackenthorp氏は牧師としての立場にある人には前代未聞のことであったが、Squire Cassの家で催されたNew Year's Eveの舞踏会では大いに踊りを楽しんだものである。そのことについて舞踏会の見物を許された村人たちは多少の違和感を秘めながらも'There was no reason, then, why the Rector's dancing should not be received as part of fitness of things quite as much as the Squire's' (「牧師が踊ることは地主が踊るのと全く同じく事の次第ではふさわしい行為であると見なされるべきでない理由は何もない」) ⁽⁶⁷⁾と考えていた。逆のみ方をすれば当時のRaveloe村の宗教感からはCrackenthorp氏は多少の物足りなさはあるもののおおむね満足のいくRectorであり、車大工・Ben Winthropの妻Dollyが言うように、Crackenthorpe氏が教会で話す言葉はやはりRaveloeの教区民にとっては何にもまして精神的な生きる支えともなるありがたいものであった。Raveloe村の村人たちの宗教感はこのDollyが折にふれMarnerに語る言葉の中に総括されるであろう。

"...there was the fever come and took off them as were full-growned, and left the helpless children; and there's the breaking o' limbs; and them as 'ud do right and be sober have to suffer by them as are contrairy-eh, there's trouble in this world, and there's things as we can niver make out the rights on. And all as we've got to do is to trusten,...—to do the right thing as fur as we know, and to trusten. For if us as knows so little can see a bit o' good and a rights bigger nor what we can know—..." ⁽⁶⁸⁾

(「...熱病にかかり立派な大人が死んでしまいよるべない子供たちが残されることもありますものね。それに手足を骨折する場合だってあるし。それに正しいことをしまじめに生きている人がそうでない人のことでとても苦しまなくちゃならないこともあります—ええこの世の中には困難なことがありますねえ。正しいことの見分けもできないことがあります。でも私達がやらなければいけないことはただ信ずることです...—できる限り正しいと思うことを行ないそし

て信じることです。だって、もし私たちがちょっとだけでもいいことや正しいことがわかったらきっと私達の知らないもっと大きないいことや正しいことがあるのではないのでしょうか— …」)

すなわちRaveloe式神学は、どんな不幸に遭遇しようとも自分の成しうる限りの正しいことを行ない正義であり善である神を信じることであった。このようなRaveloe村の宗教感の下では日曜日毎に教会に行くことは、Felix HoltのTreby Magnaの人々がMr. Lyonのchapelに熱心に礼拝に来たのとは異なり、内面的な必要に迫られた当然の行為ではなく単なる習慣の一つに墮し、それはまたRainbowでの村の人たちの会話からもうかがえるように村民たちの楽しむべき一つの行事ともなっていた。彼らは日曜日に教会で牧師が行なう説教をきくよりも賛美歌を歌う合唱隊に加わったり、教会の執事や代理執事の仕事をよりよく行なうことに対してなお一層の満足感を感じ、「男はたっぷりと食事をとり女たちは必要時にそなえてたくさんのリンネルをためこんでいる」満ち足りた生活にまだ何の疑問も抱く必要がなかったのである。

(c) Little Treby村について

*Felix Holt the Radical*はその題名とchapter Iがまさに1832年9月1日という第一次選挙法案が英国議会を通過した日付で始まっていることから推察されるように、小説の背景となるTreby Magnaや、その町からほんの一マイルほどしか離れていないLittle Treby村も含めて、その住人たちやそこで起こるもろもろのできごとなどの小説のモチーフとなるもののすべてが、産業革命や農業革命などによってもたらされた社会的政治的激動の中でもさらにその頂点となった第一次選挙法改正に何らかの関連を持っている、Dickensの*A Tale of Two Cities*にも匹敵されうるいわゆる政治色の濃い小説である。⁽⁶⁹⁾

主人公Felix Holtは新興のmanufacturing town・Treby Magnaの裏通りでかつて父親が存命中小さな薬屋を開いていた貧しい家の一人息子であり、一方彼と対照されるsub-hero的存在のHarold TransomeはFelixとはまさに正反対のLittle Treby村の由緒ある家柄の地主・Transome家の後継者である。Treby Magna周辺のLittle TrebyやSproxttonなどの小さな村や町はその住民が総じてTrebianとよばれるほどにまで今や破竹の勢いで工業的な発展の途上にあるTreby Magnaの町にまさにのみこまれそうな状況の下にあった。したがってLittle Trebyの村の歴史や実態はTreby Magnaの町の歴史や変動に目を向けることなしには語れない。以降はTreby Magnaでのできごとに主眼が置かれているが、そうすることによってLittle Treby村を背後から相照らそうという私自身の意図にもとずいていることをここにことわっておく。

Treby Magnaは19世紀の初めまでは都市部の人たちに小麦やチーズ、干草などを供給する緑豊かな田園地帯のまん中に静かに横たわった平和で穏やかな市場町で、昔の市場町特有の大きなビールの醸造場があり、fairの日やmarket-daysばかりか日曜日にも、羊毛の袋詰めやチーズの荷運び、さらに馬が静かに草を食べている光景などで満ちあふれていたものである。しかしまずTreby Magnaのその近辺に運河が敷かれると共にTreby Magnaから2マイルほど離れたSproxttonの町で炭坑が掘られ始め、一方Treby Magnaの町自身でも鉱泉の発見があり、温泉場(watering place)への移行計画からその失敗を経て、結局産業革命の時代的風潮に

のり、ほんの20年ほどの間に上に記したようにきわめてのどかだった市場町からminesとmanufacturesの町に一大変貌を遂げたのであった。しかしその大變貌が町の内部からの自然発生的なものではなく、外部からもたらされたものであったため、ゆったりとのどかなmarket-town特有の、周囲に広がる豊かな田園地帯 (rural district) を形成する村々にも、Treby Magnaの社会的激変の衝撃を強要する結果となった。しかしそのような豊かな農村はAdam BedeのHayslope村やSilas MarnerのRaveloe村を考察した折に十分見てきたように、やはり昔ながらの英国国教会教区牧師の村であり、さらにTreby Magnaがひじょうに古くからのmarket-townであった関係上、Treby Magnaの郊外のPark Streetの先にはTreby ManorとよばれるbaronetであるDebarry家の広大な荘園があり、またLittle Treby村にはこれも大きなManorを有するTransome Courtがあるという、前号の3で述べたような中世の封建農村さながらの、Hayslope村やRaveloe村よりもさらにさらに古い意識と形態を持つ村であって、Treby Magnaの変動の衝撃にそうたやすく適応することはできなかった、というより、逆に意識的には相対する関係が生じていたのである。

町の周囲にそういった伝統的な古い勢力を温存しつつ、Treby Magnaにもたらされたmineはそこで働く人々のhamletを次々に生じさせ、町のmanufacturing化の深化と共に、低所得者層の労働者を急速に増大させることになった。彼らは彼らの置かれている無味乾燥で不安定な立場を何とか納得させるために、Treby Magnaの伝統的な英国国教会に対するDissenterなどのIndependent⁽⁷¹⁾の宗教的真実を熱心に追い求めた。

このように外部的な強制力によって、近郊の豊かな田園地帯の地主階級と緊密な関連を持つ商取引が行なわれていた単なるmarket-townから国家の大きな流通機構に組みこまれたmanufacturing townに変遷を遂げたことからくるTreby Magnaの内部的混迷は、宗教面にまず現われ、労働者階級の貴族階級にたいする懷疑を生み出し、小説の背景となっている1830年代初期のTreby Magnaは、market town当時の旧勢力とmanufacturesによる新興勢力との間で大きく揺れ動いていた。折しも穀物物価が下落し救貧税 (poor-rates) は増大し、地代や十分の一税は容赦なく取りたてられるという状況の下にあったTreby Magnaは、国家的規模の政治的運動の大きな流れが押し寄せた時それに呼応する余地は十分にあったのである。そしてIndustrial Revolutionがそのすべての引き金になったかどうかは定かではないが前号の2の部分でも述べたようにイギリス国内全般をみても19世紀は頭初から政治的変革が次々に行なわれ、格式のある農業国から商工業を主軸とする近代国家へと急速に移行するその過渡期の不穏な空気が国中をおおっていたのである。

the Reform Billに先立って行なわれたthe Cathoric Emancipation Act⁽⁷²⁾は人々を互いに疑心暗鬼にさせ、英国国教会派の人々にはDissentersやDeists⁽⁷³⁾, Socinians⁽⁷⁴⁾, Papists⁽⁷⁵⁾そしてRadicalsは結束して国教会組織を破壊する脅威として感じられた。Treby Magnaの近郊の二大地主Transome家とDebarry家にはどちらにも近親にrectorがいたけれども特にTreby MagnaのrectorであるAugustus Debarryは、Hayslope村のIrwine牧師やRaveloe村のrector・Crackenthorp氏などと同様、George Eliotの小説に登場する国教会牧師にありがちなように「短い

説教をし、すべてのbusinessに通じ、そして十分の一税をしっかりと取りたてる」というまさに典型的なold-fashioned aristocratic clergymanであったが、先に記したようなIndependent preacher,特にDissenterのministerに対して、信者たちの政治熱をあおりたてる有害な存在であり、無知な大衆を政治・宗教両面の大問題の審判者にでっちあげ、さらに国教会の教会を低俗な形でしか存在不可能にしてしまったばかりか文明のあらゆる成果を失わせ神のあらゆる教訓もなくし、人々が何世代もかけて必しに巻き上げてきている巻き上げ機を停止させてしまうひじょうにけしからん存在だと批判している。一方Dissenterのministerたちは、Augustus DebarryやTransome夫人の弟のJohn Lingonなどのrectorに対して「めくらを導くめくらの牧師」と評した。そしてTreby Magnaでは工業都市としての発展と共にDissenterがますます勢力を強めていったのである。

このようにTreby MagnaはFrench RevolutionやNapoleonic Warsの大動乱の間も何ら生活を乱されず、*Right of Man*に動じることもなく、Cobbett氏の*Weekly Register*にそれほどの刺激を受けることもなく過ぎてきたのに、the Emancipation Actを通じて「とうとうおぼろげな政治的意識に目ざめたことからくる激しい痛みを知り始めた」のである。そしてその傾向はthe Catholic Emancipation Actの二年後に施行されることになったthe Reform Actによってさらに助長されたのであった。

前号二の部分で詳細に述べたthe Reform Actの成立の過程からも推し測られるように、その法令はTory党、Whig党、それにRadicalを互いに他と区別する定義づけを不明瞭なものにさせ、特にTreby Magnaでは「個人的な品性でその人の見解を判断するというような性急な安易な方法ではしばしば裏をかかれる場合があった。」このFelix Holtの冒頭に著されている作者のIntroductionの中に登場するcoachmanが、選挙法改正法案に賛成票を投じた者の中に古くからの高貴な家柄の人々や大地主がいたその事実が大いに頭を混乱させているような、当時の英国議会に内在しているparadoxがTreby Magnaの町にもあったのである。

それはTreby Magnaがmarket townからmanufacturing townへの変遷に伴い人口が急速に増加し、さらにはまた産業革命による新興ブルジョアジーである産業資本家、商工業者などが町の中で勢力を持ち始め、ある程度の財をたくわえたTreby Magnaの中における選挙権の拡大等、the Reform Actの適用による一大変革を余儀なくされた町であると共に、近隣の農村部にはなおかつDebarry家やTransome家のような貴族が世襲的権力を保っているという、当時のイギリスにはそのような町がいたるところにあったのであろうけれども、そういった複雑な町の状態から起こされた現象であらう。

このparadoxは町のいたるところに見られた。例えば、Reformers（選挙法改正論者）が必ずしも寛大な心を持った愛国者（patriot）であり正義感にあふれていたという訳ではなかった。それにまたTory党の人たちのみんながみんな、労働者階級を苦しめて農奴の身分におとしめようとする圧制者という訳でもなかった。実際選挙権の拡大をまくしたてるLiberalsの中には、地域的利害関係を持たない人々に選挙権を与えることのおろかしさを主張するToryの人々よりもより圧制的な人もいたのである。またその一方で、Toryの中には、何かにつけて

偽善者やRadicalやDissentersや無神論 (athism) などを総じて口ぎたなくののしる者も多かったけれども、彼らの怒りをこめた赤い顔や有神論ぶった誓い等にも特に社会を救えそうな確固たる考えは見い出せそうになかった。

Little Treby村のmanorの領主Transome家の長男HaroldがTransome代々の世襲的な、いわば生き抜きのToryである思考様式を180度転換させて、Liberalはおろか大胆にもRadicalとして立候補したのは、まさにそういったTreby Magnaの社会的状況を反映したものであろう。Haroldは自分で出したその結論にいたった経緯を、Treby Magna界限では貴族階級の筆頭にあげられる自分の家・Transome家よりもさらにずっといい家柄のLingon家の出身である母方の弟でLittle Treby村のrectorをしているJohn Lingonに対して次のように語っている。

「British Toryismとよばれるに真に価するものは、the Duke of WellingtonとSir Robert Peelがthe Catholic Emancipation Billを議会で通過させて以来完全に死にたえてしまったのだ。⁽⁸²⁾ Whiggeryなんて荒々しい獣を一かみしておとなしくさせようとするような政策をとるべきでないの思想さ。⁽⁸³⁾ そのため正直な人間は自分がToryであることを公表することはできないし、かといって身の毛のよだつべきでないのWhigになることなんてなおさらできないのだから、自分に開かれた道はたった一つしか残っていないのだ。…今日のような望みのない時勢では良識ある人々や良家の者たちには、自分たちが急進党員であると宣言して国家の破滅を阻止し、物事すべての変化の避けられない過程を無一文の扇動政治家(beggary demagogues)や金持であることを自慢している商人の手から取り上げること以外には何も残されていないということがまさに明白となっているのだ。」⁽⁸⁴⁾

すなわち高貴な家柄の出身でありながら英国議会でRadicalとして出馬するHaroldの一見矛盾しているようにみえるこの行為は、イギリスの選挙形態を、ひいてはイギリスの政治そのものを変えることになる画期的かつ革新的な第一次選挙法案がWhigを中心とするLiberalの人々の尽力で法令化されたことから明白のように、英国議会内でのToryの力が微弱になり、Liberalの力がますます強大になっていくその社会情勢に便宜的に対応しようとしたまでのことで、彼自身は心情的にはTransome家そしてLingon家の世襲的思考様式であるToryの立場をあくまで貫こうというものであった。第一次選挙法案が英国議会で可決された1832年9月1日のまさにこの日、HaroldとJohn Lingonが声をそろえて“to save the country”⁽⁸⁵⁾（「国を守るために」）と叫んでいるのは、衰退の一途にあるLingonの高貴な家系や由緒あるTransome家の家名を何とか守ろうとする没落寸前にある貴族の悲痛な叫びにきこえる。

それにしてもHaroldのRadical出馬はTreby Magna周辺の古い村々ばかりか、新興の工業都市Treby Magnaの人々をも大そう驚かせるできごとであった。おじのrector・Mr. Lingonも例外ではなかったが、近しい人との仲たがいを嫌い、あまり物事を深く考えないeasy-takingな性格から、結局「まあ君、世の中が沼地に変えられたなら我々は靴やストッキングをぬいで鶴のように歩き回るべきだと思うよ」⁽⁸⁶⁾と言い、“O save my country”と叫ぶことでHaroldの主張に同調し全面的な支援を約束することになった。しかし自分の血の中にある高貴な家系と、それを裏付けるToryであることを生きるよすがとしている母親の、Transome家の事実上の

主人Mrs. Transomeは、Little Treby村のような片田舎にあってrich Radicalなるものをどうしても是認することができない。彼女はHaroldのその決断に対して次のように言う。

“…you seem not to imagine how your putting up as a Radical will affect your position here, and the position of your family. No one will visit you! And then—the sort of people who will support you! You really have no idea what an impression it conveys when you say you are a Radical. There are none of our equals who will not feel that you have disgraced yourself.” …— “It seems to me that man owes something to his birth and station, and has no right to take up this notion or the other, just as it suits his fancy; still less to work at the overthrow of his class. That was what ever one said of Lord Grey, and my family at least is as good as Lord Grey’s. …For my part, I can’t conceive what good you propose to yourself. I only entreat you to think again before you take any decided step.”⁽⁸⁹⁾

(「…あなたは急進主義者として議員に立候補することがこの村でのあなたの立場に、それからあなたの家族の立場にどのように影響するか想像もしていないようね。誰もあなたを訪ねてこなくなるわ! あなたを支えてくれるはずの人もよ! あなたは自分が急進主義者であるという時、それが人にどんな影響を与えるか全く考えてもいないんだわ。あなたが面目をつぶしてしまったと感じないような人は私達と同じ身分にある人々の中には一人もないわ。」……「人間はその人の生まれとか地位とかに何か負うところを持っていて、気ままな意見をあれこれ勝手に持つ権利は全くないし、なおさら自分の属する階級をひっくり返すようなことをする権利はないと私には思われるの。それはグレイ伯についてみんなが言ったことで、それに家の家系は少なくともグレイ伯の家と同じぐらい高貴なものよ。…私としては、そんなことをしてあなた自身何の徳になるのかしらと思うの。私はあなたが確固たる段階をふむ前に是非もう一度考えなおしてもらいたいと思っているだけよ。)」

英国議会でいかにLiberalがConservativeを圧倒していようとも、農村部の貴族たちにはやはり根強い保守的傾向があったことがわかるであろう。中でもMrs. TransomeはHaroldがSmyrna⁽⁹⁰⁾に行っていた15年間の間痴呆症の夫に代わり実質上のTransome Manorの領主的役割を果たし、日常生活においてもわずかな変化も極力嫌い、古来からの古い農法に固執する古い型の小作人を愛する保守的観念のひじょうに強い女性であった。「自分の命令の外で行われた仕事は自分の気に入るようにもう一度初めからやりなおさなければ気がすまず、馬に乗って領内を見回りに入った時、自分の足下で小作人たちが帽子をとっておじぎをするのを見るのが好き」なこのTransome夫人にとって、たった一マイルしか離れていないところにあるTreby Magna⁽⁹¹⁾に吹き荒れている憂うべき新風はそれでも時代の波としていたしかたないと思われたとしても、自分の人生のすべてである最愛の息子HaroldのRadical表明は彼女の目にはその誉れ高き過去と現在の安寧に対する一縷の望みを彼女から奪い去る屈辱的な行為に見えた。それだけイギリスの当代の人々が階級意識に過敏であったからであろうが、George Eliotの小説ばかりかDickensのもろもろの小説等、血すじ(blood)を重んじる風潮がひじょうに色こく見られる小説が19世紀初め頃の小説に特に多いけれども、このTransome夫人にとっても血を分け

たHaroldだけは老い先短い自分の分まで、考え方をも含む自分と同じ純粹のLingonのbloodを受けついでいると確信することはまさに、何ものにも侵されることのない絶対的眞実となっていたのである。しかしその息子とても自分の存在の根拠ともなるべきその絶対性を脅かす一要因であったことがわかり愕然とする。Mrs. Transomeはいわば産業革命、農業革命、そしてそれに伴って起こった社会変革から古来の農村を守ろうとする最後のとりでなのであった。

母親を失意のどん底につき落とし、昔から続いていた、Treby Magnaの近郊のManorの所有者でbaronetのDebarry家との友好関係を絶ち切るという大きな犠牲を払って行われたHaroldのRadical宣言⁽⁹²⁾であったが、Treby Magnaの労働者たちの貴族に対する視方はあくまで厳しく、貴族のすることはすべて自己の安寧を計ろうとするものであって、the Reform Bill自体も貴族の持つ独占権 (monopoly) を自ら安泰にしておくための公けに宣言された特別の城守にすぎないという人すらいた。そして政見発表の当日、John LingonとHaroldの演壇の前には多くの聴衆がいたけれども、それは立候補者Haroldへの人気ではなく、絶対的なToryの家系でありながらRadicalとして出馬したその貴族の特異性に対する興味であった。

Felix Holtの中ではその小説の性格上、Treby Magnaの町をバックグラウンドに置いている貧しい労働者FelixとLittle Treby村を代表する富裕な貴族Transome家の動向を描き、彼らの属する社会、あるいはその生き方の中にある不合理、矛盾に主眼が置かれ工業都市そのものの内部的矛盾はそれほど厳しく追究されてはいないけれどもTreby Magnaが工業都市であるという事実から、Treby Magnaの町の内部にも先のGaskell夫人の、当時のイギリスの最大の工業都市Manchesterを背景⁽⁹³⁾にしているといわれるMary Bartonの世界に表れる資本家と労働者の間のものほどではないとしても、それに類するむずかしい矛盾が介在していたことも否定できないであろう。その上、新興の町という性格上、先に述べたようにthe Reform Billの直接的影響をもろに受け、初めて投票場に指定されるという栄誉に浴したこともあって、the Reform Billの是非に対する議論が白熱化し、Treby Magnaの政治熱はいやが上にもあおりたてられ、それはその年の12月に行われた国会議員選挙に向けて最高の盛り上がりを見せた。選挙前の12月15日候補者の任命 (nomination) があった時にはそのnomination会場ではFelix Holtの主人公Felixも含めてRadicalに属する多くの労働者の演説があった。彼らの主張は概して人間の、それも自由な立場に置かれた人間 (freeman) の当然持つべき権利についてであって、それは自分たちに何らかのかかわりを持つ事から対してはよく考え発言し行動することであり、さらには自分たちを治めることを仕事とする立派な紳士たちが自分たちのために最善の努力を傾けているかを見ることであった。Felixは特に、その人々の当然分け持つ権利 (man's share) はどのようにして獲得されるべきかについて論じている。彼はそのためには物事の自然的法則をよく見きわめることによって政治的力 (political power) を我々みんなが大いに獲得することであると言う。

FelixはHaroldがTreby Magnaから2マイルほどはなれた炭坑の町Sproxttonの坑夫たちにお酒を飲ませたりわいろを使って選挙運動をしている事実をRadical partyの不名誉なふるまいとしてHaroldに直訴した折、Haroldに向かって自分のRadicalとしての立場を特権 (privi-

lege) と独占権 (monopoly) と圧制 (oppression) の3点に対するものと表明しているが、nominationの日の上記の演説は自己のそのRadicalの立場を全うするための前段階的心構えに關してであった。

そのようなFelixがHaroldのRadical宣言の中に大きな欺瞞を見出したのは当然である。私生活においてもFelixは父親の死後、長男として当然譲り受け発展させるべき薬屋を、自分の信念に合わない利益追及の忌むべき仕事であると言って拒否し、時計作りやその修理の職人として母親と近所の孤児Jobの三人の最低の生計をたてている、貧乏をモットーとする青年であって、高貴な家系に裏付けられ、巨万の富を持ってまぶしいばかりに輝いているHaroldにRadicalとしての必然性は微塵も感じられないからであった。FelixがHaroldに対して感じた最大の反感は、Treby MagnaのDissenterのminister・Mr. Lyonと共に行った、Haroldの選挙運動の卑劣さへの抗議に対して示したHarold側の誠意のなさであった。これはすべてTransome家の顧問弁護士であると共にHaroldの選挙運動を指揮していたJermynの「選挙というものは自分の前の戦場に誰がいるかということと、その候補者の差配人たちの手腕による」⁽⁹⁴⁾という信念にのっとなって行われたものであった。

Treby Magnaの選挙区で四人が立候補したけれどもToryが1人、Whigが2人、Radicalが1人という内訳である。しかし、Treby Magnaの社会自身がそうだったのか、あるいはこの小説の性質上からくる現象であるのかどうかはわからないがWhigは政治のかじを極端な方向にとらない中葉の政党と考えられてはいたが、Toryへの反目とRadical支援に徹していたTreby Magnaの労働者階級はWhigもまたToryに追随する敵とみなしていたようである。しかしこの当時のTreby Magnaで起きているすべての現象をそのような党派と結びつけることはできない。驚いたことに貧しい労働者たちの共済組合 (benefit club) の中にもToryであるDebarryを支持するものがかなりあったのである。しかし候補者Philip Debarryはそのbaronet家の極端なTory主義を標榜しておらず、父親の理解できないNew Conservativeであることを考えればそれも当然のことであったかもしれない。

Haroldの政見は、救貧法 (poor laws) や慈善施設 (charities) や英国国教会等の、改革の余地のあるものはすべて改革することであった。がしかし、この主張はどの方向からみてもRadicalの同志たちの間で熱狂的に迎えられるものとはなりえないのである。Treby Magnaの人々はthe Reform Billによってもたらされた政治的、社会的大変革のピークにさしかかっているその選挙とそのあとに出現する新しいTreby Magnaの町にたいしてRadicalはもとよりToryに対してももっともっとせっぱつまった期待を寄せていたのである。

Treby MagnaのToryたちの間では、「国を建て直すためには自分自身善なる意志を持った王に待つより他はない。Radicalsは労働組合 (trade union) の代表者を国民の統治者にすえ、すべてを彼らの意のままに秩序づけようとしているが、彼らのさわやかな弁説の中に潜んでいる矛盾に彼らは気付いていない。彼らが『すべての人のために善なるものを我々は求めているのだ』と言っても、彼らのその『すべての人のために善なるもの』とは一体何であるかを知らない。糾弾すべきは新しい商業組織である。我々は貴族がいなくなったらやって行かれない。貴

族を追放したら新しくならざるをえないのだ。我々に危害を及ぼしているのはフランス革命だ。Harold TransomeのRadicalとしての選挙出馬は議会に当選するための単なる方策で、当選したら彼は一変してしまうだろう」等々の議論でもちきりである。

選挙はWhigのGarstinとRadicalのHaroldとの間に激しい票の取り合いが予想された。選挙の当日投票場に指定されたTreby Magnaの投票所には町中の人たちばかりか近辺の町や村の人たちが投票権を持つ人に限らず持たない人たちもみんなが早朝から集まってきた。人々はこぞって自分の支持する候補者の応援をするのである。このような形で選挙権を持たない人たちも選挙に参加している意識を持てたのであったが彼らの応援合戦は時には度がすぎるほどであり先に述べた、ほとんどの者が選挙権を持たないSproxttonのminerたちを選挙運動として響應したHaroldの意図もその応援合戦に負けないための方便だったのである。当日Treby Magnaの投票場に集まった人々の中にはすでに事前から不穏な空気があり、暴動(riot)の勃発する予感があった。低所得者層のRadicalたちは選挙権を持たない者が多かったにもかかわらず選挙会場では特に貴族階級や地主階級に対する反感をむき出しにし、お酒の勢いに乗じて騒ぎたてる不穏な輩の集団で、Toryから立候補しているDebarry家の長男PhilipとWhigのGarstinを支持する者たちはそのターゲットになりやすかった。それぞれの党は、Toryはオレンジ色、Whigは濃紺色(mazarine)、Radicalは青(blue)というふうに政党色を持っていて、benefit clubなどの団体はそれぞれが支持する党の色のリボンとかcockadeなどの装飾品を身につけ一目わかるようになっていた。しかし何の装飾品をつけていない陰気な顔をした工夫(navvies)や炭坑夫、石切人夫なども数多くたむろしていて、彼らはどの候補者を応援するか、またどの候補者をけなすかと思案しながら明確な政治的見解もない野蛮な力を内に秘めて、ただその重大なできごとのあるTrebyにいるという自由を楽しんでいたのである。

Trebyの酒場(public-House)はどこにもぎやかで、時が進むにつれ、Trebyansの意気はますます高揚していった。主だったpubはそれぞれ支援する候補者が異なっていて、したがって思い思いのpubに集う人たちもその当然pubと同じ政党色を持つ人達なのである。候補者による響應はもはや禁止されてはいたものの、その当日の飲酒に関しては別の名目の下で候補者のもてなしになっていた。そういう状況であったから、常日頃からお酒を飲んで騒ぎ、日頃のうっぷんを晴らす機会に飢えていた労働者階級がこのチャンスのをのがすはずはない。その上the Reform Actの後初めて行なわれた選挙であるということもあってか、その日のTreby Magnaの選挙会場であるmarket-placeは時がたつと共にますます無政府状態がひどくなっていった。人々を大混乱に巻きこんだ最たるものは、上に記したような、選挙権を持つ者も持たない者もみんなが参加できる応援合戦である。それぞれの政党色を同じくする人々はvoterが通る主要通りの要所要所に場所をとり、ToryのDebarryやWhigのGarstin、RadicalのHaroldへの応援を各voterの耳や頭がおかしくなるほどにまでしつように、かつ苛酷だと思われるほどの方法で行なうのである。この応援合戦でもっとも激しかったのはToryのDebarry側であった。

選挙会場のあたり一帯に広がっているこの無政府状態はそれ自体に危険な因子が内在してお

り、その上さらにお酒の勢いが加われば事態は収拾に向かうはずはない。当初応援合戦から始まったその混乱はたちまちのうちに確固たる政治的意識も持たない底辺の労働者たちを巻きこんでいった。警察官も指揮的役割をするhigh constableから実際に機動力を発揮するregular constableまでの多数の者たちが警備に当たっていて、その混乱を少しでも鎮めようとTreby Magnaのrectorやmagistrates（治安判事）などの協力を仰いで実力を行使することになった。しかしそれが効力を持ったのはほんの一時で混乱はさらにひどくなり、選挙続行も危ぶまれるほどにまでなっていた。

群衆は少なくとも2000人ぐらいと推定され、投票場に通ずるTreby Magnaの通りは大混乱に陥っており、様子を見に行っただけのFelixではあったがたちまちその群衆の中に取りこめられてしまう。そこには貧しいTrebianのほとんどが集まっているに違いないと思わせるほどの群衆があり、彼らの大半はmanufacturing townに独特のひじょうに鋭い目つき（keener aspects）をした人たちであった。彼らは明らかに酒で加勢され、まるで牛か豚の大群のように騒々しいわめき声をあげ、お互いにけんかを始める者、なぐり倒す者、そのあげく引きずり回したり、またつかみ合いが始まったり、惨憺たる状態に陥っていた。検察官すらも群衆に巻きこまれもうどうすることもできず、多くのけが人が出ていることは疑いの余地はなかった。とうとう選挙は中止され、Riot ActがRectorによって近くの旅館のバルコニーから読まれたが、さしたる効果は見られず、近くの都市から騎兵隊（cavalry）が要請されるべく着々と準備が進められた。群衆は近くの八百屋の店先から奪ってきたじゃがいもとかかぶとかを警察官に投げつけたのをきっかけに、さらにそれらを、近くのWhigのGarstinの拠点である旅館Seven Starsに投げつけ、たくさんの窓ガラスを打ちこわした。Tory sideからmilitaryが要請されたことが伝わると群衆の叫びはさらに野性味を帯び、彼らはじゃがいもやかぶなどよりもさらに強力な武器を供給することを約束する金物店（hardware shop）に向かった。群衆の中に極立っていた意志は反Debarry（Tory）、好Transome（Radical）であることは明らかで、侵害されたshopのすべてが“Tory shop”であった。しか彼らriotersの中にははっきりした政治的情熱とか社会に対する激しい怒りがあった訳ではない。12月の、たちまち迫ってくる夕暮は事態をなお悪化させた。火事への恐怖もふくらむ中、誰しもが近くの2つの小路に並んだ、market-town当時の名残のビール醸造所やお酒やワインの貯蔵所をその激しい興奮がうずまいているriotersから何としても守らなければならないと考えた。

しかしSeven Starsの窓ガラスを割ってまず具体的な一つの示威行為の突破口を開いた群衆の当面の目的は、その旅館を徹底的に破壊することであり、そしてさらに旅館の主人Sprattを、特に個人的な恨みを抱いているという訳でもなかったのに、外に引き出し打ちのめすことであった。とうとう群衆の中の一群がSeven Starsのへいをよじのぼり中に乱入した。彼らはある者は酒場に行きある者は地下のぶどう酒貯蔵室に下り、またある者はSprattあるいはその身がわりとなる人を求めて二階のあらゆる部屋を探して歩いた。Sprattは発見されるやいなや上着も着ないで悲鳴をあげながら階下に引きずり下され外に引き出された。さらにSprattは広い通りに入るまでそのまま引きずられ、そこで群衆に取りまかれけられたりなぐられたり思い

のままにされようとしていた。Felixはこの危険を悟り、また群衆の中に小路の中の酒蔵をねらっている気配を感じとり、Sprattと酒蔵の両者を狂気じみた興奮に酔っているriotersの手から守ろうと画策する。そしてまずSprattに近づこうとした時、折しも元気のいい警察官の一人Tuckerと衝突する。TuckerはFelixがSprattにさらに危害を加えようとしているriotersの一人と誤解したのだ。Tuckerの攻撃はたちまちFelixを彼と組み打ちさせる結果となった。大きくて頑丈な体の上に力の強いFelixはまもなくTuckerを徹底的に打ちのめした。警察の権力に対しても反目しているriotersの見守る中、Tuckerにたいしてそのような勝利をおさめたFelixは今やriotersの敬意を得ていた。それはFelixが当初の目的のSprattと小路の中のお酒の貯蔵所を群衆の手から守るという画策を実行に移す好条件となった。彼はTuckerをそこに放置したままriotersを指揮して今や騎兵銃、サーベル、鉄砲と除々に武装を強めた警察官たちに守られていたその酒類の香りに満ちた二つの小路からriotersを遠ざけようとする。

そのような過激な行動をとった主たる人たちは炭坑の町Sproxttonの労働者で、たびたびSproxttonに出かけていたFelixは個人的に顔見知りの人も多かった。Sprattを引きずるのではなくしっかり立たせて連れてくるように人々に指示し、彼は群衆をとにかくその町の外に導き出すことを考える。Felixは自分が大きな危険を犯していることを意識していた。通りの分岐点に来た時Felixはそこの広場の石の演壇の上にある道しるべにSprattを二・三枚のハンカチで手ごとしっかりゆわえつけることを指示する。彼はそうしておけばriotersがいなくなった時誰かが来てSprattを救い出し、そのままではどうなるかもわからないSprattの命を残忍なriotersの手から逃れさせることができると考えたのである。そのようにして意図した目的の一つを無事果たし、何とかしてそのriotersを町の外に連れ出すというもう一つの目的を遂行しようとした時、riotersの中の、より過激な思想を持つ集団の指示で群衆は突然Felixの全く思いもかけないコースをたどることになってしまう。その街路の先にあるTreby ManorとよばれているDebarry家の襲撃である。その地点までは何とか2000人ほどもあるriotersの意志を統率することができたFelixであったが、確固たる目的意識もないままにFelixにしたがってきたriotersの意志は、ひとたび具体的な目的を定められた時、ただそれを阻止しようとするだけのFelix一人の力ではどうすることもできなかった。そればかりか津波のようにおしよせるriotersの力に巻きこまれFelixもまたDebarry家襲撃へと向かうことになる。

riotersがDebarry家に着いたまさにその時、そういう事態を察知していたのであろうかsoldierたちが馬でかけつけ、Debarry家のテラスでは銃の音がとどろき、Felixの、拔身のサーベルを持った腕の肩を貫通した。Felixはその日ほとんど食事をとっていなかったこともあり、力なくその場に倒れた。riotersたちの反乱もついにそこで終結する。Felixはriotの首謀者とみなされ、警察官襲撃と人殺し、民家への暴挙の3つの罪で逮捕されることになる。Sprattのことで誤解され格闘になりFelixに打ちのめされた警察官のTuckerは結局背骨の損傷を受け死亡したのであった。

以上ながながと1832年12月にReform Bill後初めて行なわれたTreby Magnaの選挙という一大エポックの前とその当日のできごとの概要を述べてきたのであるが、これらのできごとを通

じてそのReform BillがTreby Magnaに、そしてまたLittle Treby村に表象されるイギリスの古い農村に、さらにそれらの地域に住む人々に与えた影響についてGeorge Eliotが考えていたことを我々は明確に知ることができるのである。このことについては次の章で詳細にみていこうと思う。

(注)

- (1) 上田女子短期大学紀要第十四号1991年4月刊『Adam BedeのHayslope村, Silas MarnerのRaveloe村, Felix HoltのLittle Treby村がそれぞれの小説に意味するもの』嶋田貴美子 1. はじめに
- (2) *Adam Bede*, Collins CLEAR-PRESS (London and Glasgow, reprint 1963) Introduction by Gerald Butler
- (3) 「ジョージ・エリオット」 P. 27 R. アシュトン著 前田絢子訳 (株)雄松堂出版 1988年9月
- (4) Ibid P69
- (5) 同上 *Adam Bede*, Introduction
- (6) 「アダム・ビード」 G. エリオット 阿波保喬訳 解説 開文社出版株式会社 (昭和54年7月)
- (7) *Silas Marner*, CHAPTER3 The Penguin English Library (1978, Great Britain)
- (8) 同上 *Adam Bede*, chapter 53
- (9) 英国国教会・教区牧師 (教会財産の収入や十分の一税などを領収する) ・俗っぽい存在とみられる場合が多い
- (10) leggings: きゃはん すねあて
- (11) Dissenter: 英国国教会反対者
- (12) Methodist: 1739年英国オックスフォード大学においてCharles & John Wesley兄弟及びGeorge Whitefieldが起こした宗教 (KENKYUSHA'S NEW ENGLISH-JAPANESE DICTIONARY 1953) 1799年までにMethodistは数派に別れていた。1797年民主的教会組織を主張する人々はウェズレーの独裁的教派から脱退した。ジョン・ウェズレーは分派的な教団もしくは教会を意図していなかった。メソジストの最初の組織は国教会と競うのではなく、その働きを補う、信仰をさらに強める教派を作ることであった。(同上「アダム・ビード」8章 注(1)(2)開文社出版)
- (13) 同上 *Adam Bede*, Chapter 17
- (14) 同上 *Adam Bede*, Chapter 5
- (15) Ibid. Chapter 17
- (16) Ibid. Chapter 5
- (17) Hayslope村から3マイル (1マイルは1.6km) ほど離れた市場町
- (18) 同上 *Adam Bede*, Chapter 5
- (19) Ibid.
- (20) Hall: (昔の) 荘園領主の邸宅 (manor house), (今は) いなかの大地主の邸宅
- (21) 同上 *Adam Bede*, Chapter 6
- (22) Ibid. Chapter 32
- (23) Ibid.
- (24) Ibid. Chapter 53
- (25) jester: 道化師 (fool) (特に中世王侯貴族のかかえた者)
- (26) 同上 *Adam Bede*, Chapter 53
- (27) Ibid.
- (28) Ibid. Chapter 19
- (29) Ibid. Chapter 53

- (30) 乳漿
- (31) Michaelmus: 9月29日, み告げ祭 (Lady Day・3月25日) 等と同じく四期支払い日の一日。元来は宗教上の祭日。(同上「アダム・ビード」開文社出版)
- (32) 同上 上田女子短期大学紀要十四号 注(11)
- (33) 同上 *Silas Marner*, Introduction by Q.D. Leavis
- (34) Ibid. CHAPTER I
- (35) Ibid. CHAPTER II
- (36) Ibid. CHAPTER I Note 1
- (37) Ibid.
- (38) Ibid.
- (39) Ibid.
- (40) 以上「 」 *Silas Marner* CHAPTER I
- (41) Ibid.
- (42) Winnowing-machine: 1780年 (MarnerがRaveloe村に移り住んだ頃) 以降は, それまでの数々の農業機器の発明品が大いに利用された時代で, flax (亜麻) 用のWinnowing-machineが発明されたのは1755年であった。(*Silas Marner* CHAPTER I Note 1)
- (43) 悪魔信仰: James I (エリザベス女王の死後, 女王に子どもがいなかったためその遠縁にあたるスコットランドのステュアート家から1603年に連れて来られたイギリスの王) の著書『悪魔学』(1597年) で表面化した民間信仰。医術などの技術とひきかえにSatanあるいはDemonに忠誠を誓う。
- (44) gnome: 地中の宝を守ると信じられた小人の姿をした妖精, 地の神 (『サイラス・マーナー』ジョージ・エリオット作 土井治訳 注244 岩波書店 1988年)
- (45) brownie: 方々の人の家について, 人知れずその家の仕事を手伝うという慈悲深い毛むくじらの伝説上の鬼 (Ibid. 注245)
- (46) 妖精神仰: gnome, brownieはNorman Cougquest時Anglo-Saxon民族が北方からイギリスにもたらしたelfで, England土着のCelt民族が信仰していたものがfairyである。
- (47) Cliff's Holiday: ロンドンで仕立屋をしていて財をなしたCliffはRaveloe村の広大な土地Warrensを購入し, そこでgentry階級の仲間入りをしようとするが, 馬にすら乗れない自分のふがいなさを嘆き膨大な厩を建て多数の馬を飼って狂い死にした。それから少し後, その土地はLameter氏のものとなったが, その厩の辺で休日になるとろうそくの灯がともるといううわさがたった。悪魔が地獄の底から彼に休日をくれたのだという。
- (48) coach-horn: (昔駅伝乗合馬車で用いた) 馬車ラッパ
- (49) 同上 *Silas Marner*, CHAPTER I
- (50) Napoleonic War time (1805-15)
- (51) Whitsuntide: 聖霊降臨節 (Whitsunday・聖霊降臨祭から一週間, 特に最初の3日間)
- (52) Easter: 復活祭 (キリストの復活を記念する祭〔日〕; 3月21日またはそれ以後の満月の次の第一日曜日; その日をEaster DayまたはEaster Sundayという)
- (53) 同上 *Silas Marner*, CHAPTER I
- (54) spirits: 火酒 強い酒
- (55) fustian jackets: Fastian was made of a mixture of flax and cotton (later only cotton) with a twill texture or nap, dyed a dull natural colour and used characteristically for labourers' clothing. Gertrude Jerkell in *Old English Household Life* says: 'Fortunately, nothing is ever likely to supersede those two splendid cotton materials, corduroy and fustian. The old labourer resting by the roadside is clothed in these.....' (*Silas Marner*, CHAPTER 6 Note 1)
- (56) mole-catcher: mole-trapping was a specialist's job, both ridding the land of a pest and

supplying skins for waistcoats and other articles of clothing much in demand ; and a trade pursued by night as well as day gave opportunities for poaching with less risk of being caught and imprisoned for the breach of the Game Laws than others ran who had no excuse for being out at night. (*Silas Marner*, CHAPTER I, Note 4)

(57) 同上 *Silas Marner*, CHAPTER 5

(58) Ibid. CHAPTER I

(59) spun butter : butter which had been worked up for ornamental purposes into fine thread-like consistency

(61) orts : left-overs, to which the poor had a traditional right. The seasonal merrymakings of the richer class were welcomed by the poor as 'a fine thing' for them. (*Silas Marner*, CHAPTER 3, Note 2)

(61) 同上 *Silas Marner*, CHAPTER 3

(62) Ibid.

(63) Ibid. CHAPTER 9

(64) Ibid. CHAPTER 3

(65) Ibid. CHAPTER 2

(66) Ibid. CHAPTER 11

(67) Ibid.

(68) Ibid. CHAPTER 16

(69) 英国の小説家・Charles Dickens (1812-70) 著, フランス革命時のParisとLondonを背景にしている

(70) 運河: 1830年代の大規模な鉄道建設以前には, 運河や水路が急速に作られ, 1815年までに2600マイルにわたってイングランドをおおっていた。(『アダム・ビード』1章 注4)

(71) Independent: 独立教会派信徒 教会独立主義者

(72) the Catholic Emancipation Act: イギリスではヘンリー八世の離婚問題に端を発する宗教改革(Reformation)によってエリザベス朝期にカトリックとプロテスタントの中道をとる国教会(Anglican Church)が成立していた。ピューリタン革命期にはこの宗教国家体制が一時動揺したが, 王政復古期に制度された「クラレンドン法典」中の自治体法(1661年)と「審査律」(1673年)とによって非国教徒を公職から追放する排他的な国教会体制が確立した。この体制は名誉革命期の「宗教寛容令」(1689年)と非国教徒に対して比較的寛大であったホイッグ党支配によって一部緩和されたが1828年の審査律と自治体法の廃止および翌年のカトリック解放令までは一貫して政治宗教面での国教徒支配が存続しつづける。(『世紀まつまでの大英帝国』長島伸一著 P. 154 法政大学出版局1987年)

(73) Deists: 理神論者; 超自然的啓示を排し理性と自然だけに準拠する合理主義的有神論

神は世界を創造したが以後創造した世界には干渉せず, 世界はそれ自身の法則によって動き, 自己展開するという思想

(74) Socinians: 三位一体説, キリストの神性, 原罪などのキリスト教の伝承的教理を認めず, キリストは奇跡的に生まれた人でその諸徳を認める人のみが救済を得るとする

(75) Papists: ローマ・カトリック教徒

(76) *Felix Holt the Radical*, CHAPTER III

(77) French Revolution: 1789年7月Bastill監獄の破壊に始まり1792年Louis XV I を捕えBourbon王朝の絶対君主制や貴族の特権制度を瓦解させた

(78) (*the*) *Rights of man*: 1年間に2万部近くも売れヨーロッパの支配階級から手厚い賛辞をもって迎えられた『フランス革命の省察』の著者・E・パークの批判者で急進主義者であったT・ペインの著, 数週間で5万部という驚異的売れ行きを示した。(同上『世紀まつまでの大英帝国』 P. 108)

- (79) *Weekly Register* : 急速派のW.Cobbettによるポリティカルな週刊紙 1時は4万ないし5万部を発行した (Ibid. P169)
- (80) 同上 *Felix Holt the Radical*, CHAPTER III
- (81) Ibid.
- (82) 英国トーリー主義・純粋な英国保守主義
- (83) the Duke of Wellington : (1769-1852) アイルランド生まれの英国の将軍, 政治家, 首相 (1828-30)
- (84) Sir Robert Peel ; (1788-1850) 英国の政治家, 首相 (1834-35, 1841-46)
- (85) Whiggery : ホイッグ主義
- (86) *Felix Holt*, CHAPTER II
- (87) Ibid.
- (88) Ibid.
- (89) Ibid.
- (90) Smyrna : Izmir ; トルコ西部, Izmir湾に臨む港町
- (91) 同上 *Felix Holt*, CHAPTER I
- (92) baronet : 准男爵 : 英国世襲位階の最下位 ; baronの下でknightの上 ; ただし貴族ではなく平民
- (93) Manchester : 英国イングランド北西部Lancashire州南東部の都市 綿紡業の大中心地, 19世紀初期イギリスで最も工業化の進んでいた都市, 最初のストライキが行なわれた。
- (94) 同上 *Felix Holt*, CHAPTER XVII
- (95) 同上 *Felix Holt*, CHAPTER XX
- (96) cockade : バラの花飾り・リボンの結び目でできている端の広がった花形帽章・階級・仕事などを表わすため制服の一部として帽子につけられたが現在は主に装飾用。
- (97) (the) Riot Act : 騒擾取締法 : 1715年に発布された英国の法律 ; 12人以上の者が騒擾を目的として集会を催した場合, この法令を読み上げ解散を命じ, 応じない者は重罪に処せられた。

参考文献

- (1) *The Mill on the Floss* by George Eliot, Everyman's Library, New York, 1964
- (2) *Middlemarch* by George Eliot, The Penguin English Library, Great Britain, 1978
- (3) 「魔女の社会史」 浜林正夫 (株)未来社, 1987年
- (4) *A Tale of Two Cities* by Charles Dickens, The Penguin English Library, Great Britain, 1978
- (5) *Many Barton* by Mrs. Gaskell, Everyman's Library, New York, 1964
- (6) 「妖精の世界」 フロリス・ドラットル著 井村君江訳, 研究社, 1983年